

『お前の中、俺ので、ぱんぱんにしてやろうな♡』

く贗として捧げた巫女姫が、ヤンデレ鬼神に毎晩中出しされる花嫁にされる話く

体  
験  
版

第1話

贅として山に捧げられた夜

「鎮まりたまえ、宿りたまえ」

黎明の社で、紗夜は祝詞を切った。

白絹の御幣を左手の親指で軽く撫でる。村社の朝の禊は祖母さまから引き継いで四年目になる。

紗夜は歴代で数えれば四代目の上席巫女だった。

朝の祝詞を終え、御幣を神棚へ戻す。

そのとき、社の戸が外から押し開けられた。

「紗夜よ。話がある」

大伯父の蛭だった。

灰白の髪を後ろで束ね、温厚な好々爺の顔をしている。

けれど紗夜の祖母は遺言で言い残した。

蛭には心を許すな、と。

「……承知いたしました」

紗夜は短く答え、御幣の前から退いた。

蛭は懷から白絹の文を取り出すと、紗夜の足元へ滑らせるように置く。

「百年に一度の慣わしじゃ。山の鬼神様への贄として村は巫女を捧げねばならん。お主の名が今朝の神籤に出た」

紗夜は文に視線を落とした。

——贄。

喰われると村の年寄りも語り継いできた。

百年に一度、巫女姫が山に運ばれて戻ってこない。

紗夜は黒髪の手先を右手の指でつまんだ。

困惑のときに出る癖だ。

けれど顔は上げる。

「……私が、参ります」

「ほう。即答か」

蛭は薄く笑った。

笑顔の奥に紗夜は冷たい何かを見た気がした。

けれどそれを問う前に社の外で乾いた音がした。

妹分の椿の下駄の音だった。

「姉さま——姉さま！」

戸口から駆け込んできた椿は御幣の前で膝から崩れた。

「いま村のお年寄りから聞きました……っ、姉さまが山に……

っ」

椿は紗夜の白絹の袴の裾を握りしめて声を絞り出す。

「いやです、いやです。姉さまがいなくなるのは……っ」

紗夜は屈んで椿の頭を撫でた。

椿は紗夜の従妹で十七歳。

紗夜の祖母を慕った叔母が椿を巫女として育てた。

紗夜にとって椿は肉親と呼べる唯一の存在だった。

「椿。私は村を守るために巫女になりました」

「……っ」

「祖母さまもその前の代の巫女姫も皆、村のために神事を全うなさいました。私だけが例外であってはならぬのです」

紗夜の声は揺れなかった。

椿は袴の裾を握ったままぐすつと鼻を鳴らした。

「……姉さまの、ばか」



紗夜は微かに笑った。

——大丈夫。

自分にだけ聞こえる声で、紗夜はそう言い聞かせる。

喰われるなら、それでいい。

村が守られて椿が無事ならば、それで。

蛭が後ろで満足げに頷いていた。

山の社へ運ばれたのはその日の夕刻だった。

紗夜は薄絹の贅衣装に着替えさせられていた。

透ける一枚布の衣装で、白絹の上に金糸の神紋が刺繍してある。

内側に下着はない。

村社の規定で贅装束は素肌に直接纏うことになっている。

紗夜は祠の前に正座した。

山の奥は夕日の橙が紅紫に沈んでいくところだった。

御幣はなかった。

取り上げられた。

祠の脇に置かれた篝火が薄絹を透かして紗夜の肌の輪郭を闇に浮かばせる。

紗夜は目を伏せて右の袖口を左手で握り込んだ。

恥じらいで出る癖だ。

——恐ろしくは、ない。

紗夜はそう自分に告げる。

けれど薄絹の下で胸の先が篝火の熱に立ち上がっているのが自分でわかってしまう。

衣装の裾が肌に擦れるたびに内ももが微かに震える。

——これは、贄の身を清める神事の一部……。

そう思おうとしたその瞬間だった。

篝火がふっと低く揺れた。

山風ではない。

紗夜の正面、祠の前の闇が静かに割れた。

銀の髪が最初に見えた。

腰まで届く銀絹の髪を半分だけ結い上げた青年が、闇から歩み出てくる。

黒紫の絹の狩衣に白絹の小袴。

素足。

紅玉のような双眸。

こめかみから後ろへ流れる、黒い二本の角。

紗夜の喉がこくと鳴った。

「ほう……?」

青年は紗夜の正座から五歩ほど離れた場所で立ち止まった。

紅い瞳が薄絹越しに紗夜の肌の輪郭をなぞる。

紗夜は思わず袖口を握り直す。

けれど敬語は崩さない。

「お、お初にお目にかかります。村社の上席巫女、紗夜と申します」

「うん」

「百年に一度の慣わしに従い、贄として参りました」

紗夜は祠の前に額をつけた。

「どうぞ、お喰らいください」

数秒、沈黙が落ちた。

そして青年は低く笑った。

「——百年待った」

「……？」

「ようやく、来てくれたな」

紗夜は顔を上げた。

青年の紅い瞳がまっすぐ紗夜を見ている。

角の根元の宝玉が薄く光を帯びていた。

「俺の巫女姫」

「……？」

「お前を、喰うつもりはない」

青年は紗夜の前へ歩を進める。

紗夜は思わず後ずさった。

——百年、待った？



——巫女姫？

——喰わない？

言葉の意味が紗夜の中で繋がらない。

青年は紗夜の前で膝を折った。

紗夜の頬に長い指が触れる。

角の発する微かな熱が指先から伝わってくる。

「俺は雪牙という。山の主だ」

「……雪牙さま」

「うん」

雪牙は薄く笑った。

「お前は、贅ではない。俺の妻だ」

抱き上げられたとき紗夜は声を上げそうになった。

けれど出なかった。

雪牙の素足が闇の中を音もなく進む。

紗夜の身体は薄絹一枚で雪牙の胸に抱かれていた。

山の奥の岩肌が一段ごとに闇から霧に変わり霧の奥に社とは別の建物が現れた。

黒い瓦の屋根。朱の柱。

隠れ里の社殿。

雪牙は紗夜を抱いたまま社殿の中へ歩み入った。

内側の壁は一面銀の鏡だった。

紗夜の頬から血が引いた。

——神鏡。

高い天井、左右の壁、玉座の真上。

すべてが磨き上げられた銀の鏡で、紗夜の薄絹の姿が四方から映り返されている。

雪牙は紗夜を玉座の前の絹の褥に下ろした。

雪牙の手が紗夜の薄絹の帯にかかる。

「……っ、あの、雪牙さま」

「うん？」

「私は村を守るための贅でございます。あなたの妻にはなれませぬ」

拒絶の言葉は震えなかった。

紗夜は決めた言葉を崩さない。

雪牙は紗夜の前に膝をついて薄く笑った。

「ほう……？それで、俺の巫女姫は何が言いたいんだ？」

雪牙の指が紗夜の薄絹の襟元から肩を撫で下ろす。

そつとゆっくり。

薄絹が肩から滑り落ちる。

（……っ、だめ、見られて……っ）

紗夜は神鏡を見てしまった。

銀の壁に薄絹をはだけられた自分の白い肩が映っている。

篝火に照らされた肌がすでに薔薇色に上気していた。

「ふむ……？」

雪牙は紗夜のうなじに唇を寄せた。

「ちゅっ……ちゅっ……ちゅう……」

唇の音が三連、四連と続く。

紗夜の背筋がびくつと跳ねた。

「あっ……っ」

「百年、待っておった」

雪牙の声は紗夜のうなじの皮膚に直接落ちる。

「俺の妻にするためにな」

雪牙の手が薄絹の裾から内ももへ滑り込んだ。

紗夜の太ももがぎゅっと閉じる。

けれど雪牙の指はその隙間を割って奥へ進む。

「……すごいなあ？」

「な、なにが……っ」

「もう、ぐちょぐちょ♡だぞ？」

雪牙の指先が紗夜のあるところに触れた。

にちっ♡という小さな音が、しんと静まった社殿に鳴った。

「ち、ちが、ちがい、ます……っ」

紗夜は神鏡から目を逸らした。



けれど雪牙の手が紗夜の顎を捕らえた。

「鏡を見ろ、俺のお嫁さん」

「……っ」

「お前が、どんなお顔をしておるか、ちゃんと見ながら、しよ  
うな♡」

紗夜の視線が強制的に銀の壁へ戻される。

そこに映っていたのは薄絹を腰までずらされ、内ももを開か  
れた自分だった。

雪牙の長い指が紗夜のおまんこの割れ目をなぞっている。

にちゃ♡にちゃ♡にちゃ♡

鏡越しに見るその光景は、紗夜が一度も想像したことのない自分の姿だった。

（やだ……、私こんなお顔……っ）

「ほう……？ じれったいのか？」

雪牙の指が紗夜のおまんこの入口でわざと止まる。

紗夜の腰が勝手に揺れた。

雪牙の唇が紗夜の耳元で笑った。

「ほら。お豆さんこんなに膨らんで♡教えてやろうな、何が起きておるのか」

雪牙の指の腹が紗夜のクリトリスにそっと触れた。

こりっ♡

「ひぁ……っ♡」

紗夜の口から神事の言葉ではない声が漏れた。

雪牙の指の腹が紗夜のクリちゃんをこねこね♡こねこね♡こねこね♡と転がす。

「あ、っ、や、め……っ、ああ♡」

「ふむ……？ やめてほしいのに、腰は揺れておるなあ？」

紗夜の腰は雪牙の指の動きに合わせて勝手に前へ前へと押し出されてしまう。

神鏡に映る自分はもう紗夜の知っている上席巫女の顔ではなかった。

（私、こんなふうに……っ、なってる……っ）

「ほじほじ♡もしようかな？」

雪牙の長い指が紗夜のおまんこにつぷ……っとなんて入ってきた。

ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡

二本指で奥のほうをゆっくり押し開いていく。

「あ、ああ……っ、雪牙さま……っ」

「うん？」

「そ、それ……っ、なに、を……っ」

「うん♡」

雪牙の指が紗夜の入口の少し奥のふくらんだ場所を腹側から押し上げた。

紗夜の腰がびくっ♡と跳ねた。

「あぁっ♡」

「お前のおまんこの奥のふくらんだところでお前は気持ちよくなれるなぁ？」

雪牙はクスクスと笑った。

「ぬぽぬぽ♡してやろうな。ちゃんと教えてやる」

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

紗夜のおまんこから聞いたこともないような水音が社殿の中に響く。

雪牙の親指は紗夜のクリちゃんをくりくり♡したまま離さない。

「やっ♡やっ♡やあっ♡」

（あ、こんなの、こんなの、知らない……っ、お腹の中、ぎゅ  
っとなつて……っ）

「鏡、見ろよ、俺の巫女姫♡」

雪牙の声に紗夜は再び神鏡を見た。

そこに映る紗夜は薄絹を腰でくしゃくしゃに丸めて内ももを  
開き、雪牙の指を二本くわえこんでいた。

紗夜の白い頬はすでに濡れていた。

涙だった。



（私……っ、こんなお顔、雪牙さまに見られて……っ、それなのに、お腹、もつと、なって……っ）

「いい子だな」

雪牙が低く笑う。

「お前は、よく濡れる」

「……っ、あ……っ」

「ご褒美をやろうな」

雪牙は紗夜の薄絹を完全に剥いで自分の狩衣の前を寛げた。

雪牙の身体の一部が紗夜の太ももに熱く硬く触れる。

紗夜はようやくそれが何なのかを理解した。

雪牙の——ちんこだった。

紗夜の喉がひゅつと鳴った。

「ま、まって……っ、雪牙さま、わたくしそのような……っ」

「うん？ わからぬか？」

雪牙はクスクスと笑った。

「百年待った、俺の花嫁の中にいまからこれを入れてやる」

「……っ」

「ぱちゅぱちゅ♡してやろうな♡」

雪牙の腰がゆっくり前へ進んだ。

紗夜のおまんこの入口に雪牙のちんこの先っぽがぐぐっ♡と  
当たる。

ぬぷっ♡——と入ってきた。

「ああ……っ♡♡」

紗夜の身体が弓のようになった。

雪牙のちんこは紗夜の中をゆっくりゆっくり奥へ進む。

ぬっぷ♡ぬっぷ♡ぬっぷ♡ぬっぷ♡

「は……？　すごく狭いな、お前」

雪牙は紗夜のうなじに低く息を吐いた。

「全部入ったぞ。鏡、見るんだ」

紗夜は朦朧と神鏡を見た。

銀の壁に映る自分の腰の奥に雪牙の身体が深く繋がっていた。

（……っ、はいって、る……、雪牙さまの、ちんちんが、私の、奥に……っ）

「動くなよ？」

雪牙の手が紗夜の腰骨を掴んだ。

そしてゆっくり雪牙が腰を引いた。

ぬぼっ♡

もう一度押し込んだ。

ぱちゅっ♡

「あっ♡」

また、引いた。

ぬぼっ♡

押し込む。

ぱちゅっ♡

「あっ♡あっ♡」

ゆっくりが徐々に速くなっていく。

ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

（なに、これ……っ、なに……っ、雪牙さまの、ちんちんが、私の、お腹の中、こすって、こすって……っ）

「鏡、見続けろ、俺の妻♡」

雪牙の声は紗夜の耳の中で低く笑う。

「お前の中、俺でぱんぱんにふくれておるぞ」

「ああ♡やっ♡やあっ♡しゅご……っ♡しゅごい……っ♡」

紗夜の言葉が崩れた。

神事の敬語ではなく舌足らずの音が雪牙の腰の動きに合わせてこぼれてくる。

「ほう♡いい声だな、俺の巫女姫♡」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

雪牙の腰の動きが加速していく。

紗夜のクリちゃんは雪牙のお腹に擦れてくりくり♡されたまままだ。



「あ、っ、らゝめ♡ああっ♡ゆ、雪牙、しま♡らゝめ♡そこ、そこ、しゅゝ……っ♡」

「ほう……？もう、いきそうか？」

「いっ♡いっ♡いっ♡」

「ふむ……？」

雪牙の手が紗夜の顎を掴んで神鏡に向けて固定した。

「お顔、見ろちゃんと」

「あ♡」

「お前が、俺ので、いつてしまう瞬間、覚えておけ♡」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡♡

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

（あ、いっちゃう……っ、雪牙さまの、ちんちん、奥、奥、奥

っ、あ、いく、いく、いっ……っ♡）

「あゝあゝあゝ——っ♡♡♡」

紗夜の腰がぐんと高く跳ね上がった。

神鏡に映る紗夜の顔は紗夜の知らない誰かのものだった。

涙で濡れた頬、開いた口の端から漏れた涎、見開いた榛色の瞳。

雪牙のちんこを奥まで咥え込んでびくびくと痙攣する自分。  
雪牙は紗夜のうなじに口づけた。

「ふっ……は♡」

雪牙の身体が紗夜の中でどくっ♡どくっ♡と脈打った。  
どびゅっ♡びゅるるるるっ♡びゅくっ♡びゅくっ♡  
紗夜の中に雪牙の熱いものがたっぷりと注がれていく。

(……っ、あ、雪牙さまの、お種が、私の、お腹の中で……

)

雪牙はゆっくりと身体を引いて紗夜を絹の褥に横たえた。

紗夜の薄絹は完全に脱がされてしまっていた。

紗夜の身体はまだ小刻みに震えている。

雪牙は紗夜の頬の涙を長い指でそっと拭った。

「いい子だな、俺の花嫁」

雪牙の指が紗夜の唇に触れる。

「百年待った甲斐があつた」

紗夜は薄く目を開けた。

銀の長い髪、紅玉の瞳、黒い角。

——百年、待った。

雪牙はそう言った。

——お前は、贅ではない。俺の妻だ。

そう言った。

紗夜にはまだ何もわからない。

なぜ雪牙が百年、自分を待っていたのか。

なぜ自分が選ばれたのか。

ただ、雪牙の指が頬の涙を拭うとき雪牙の角の根元の宝玉が薄く温かく光を帯びるのが紗夜にはわかった。

（……椿、私は……、村には、戻れないかもしれませぬ）

紗夜の意識がゆっくりと闇に沈んだ。

沈む直前、雪牙の声が低く優しく降ってきた。

「……椀のお孫の、お孫よ。お前を、百年ずっと待っておつた」

紗夜はその名を聞いたような気がした。

けれどもう瞼が落ちていた。

# 体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。